

留学生のための物語日本史

第 10 話 北条時宗

「対馬や壹岐に攻めてきたときは何かと思った」

時の執権、北条時宗はそのように言ってため息を漏らした。

「いざ鎌倉、とはよく言ったものだ。鎌倉幕府に危機が発生したときは多くの御家人がわれらを守ることにしている。しかし、まさか大陸が大挙して攻めてくるなど誰が思ったか」

鎌倉に次々ともたらされる報告は、いずれも圧倒的な兵力で攻めてくる元と高麗の軍の話ばかりである。いや、正確に言えば「一所懸命」といわれる鎌倉武士の、自分の活躍を示した報告がほとんどである。しかし、自分の活躍を大きく報告するために、敵を過大に表現する癖が鎌倉武士から抜けない。鎌倉にいる時宗からすると、なかなか正確な敵の姿が、それらの報告からは見えにくいということになる。

「そもそも始まりは何であったのか」

チンギス・ハン率いるモンゴル世界帝国が中国の金・南宋という 2 つの王朝を倒して現在の中国を統一した。その後、中国はモンゴル語を共通語にするなど、完全にモンゴル王朝化したのである。国名はそれまでの中国王朝のように漢字 1 文字で「元」といった。

元ができる少し前から、中国には『天高く馬肥ゆる秋』という言葉があった。今では「食欲の秋」を表す言葉として日本では使われるが、当時の中国では「空が高くなり秋が来ると、北方から騎馬民族が略奪にやってきて、騎馬民族にすべてをとられてしまう。(騎馬民族がすべて持って行ってしまうので馬が肥える)」というような「諦め」とも「警戒」ともとれる意味で使われていたのだ。モンゴル帝国は「北から略奪に来た」だけではなく、そのまま王朝を倒し、その場に王朝を築いたのである。

元は、支配層をモンゴル人にしながら、政治的な内容は元の金や南宋の優秀な人材を登用することで賄った。そしてモンゴルは軍をもってほかの王朝を征服することとし、内政と軍への補給はすべてもともと民族が行うという形になっていたのである。

そのような中で征服したのが、当時、朝鮮半島にあった「高麗」である。高麗の場合は、高麗王朝を滅ぼさず、そのままの形で属国として支配した。高麗は、新たな「宗主国」である元に媚びを売ることが必至であった。元に貢物をする者、軍に入って活躍を囑望する者、その方法はさまざまであった。そのような中で、日本に近い半島南部 慶尚道咸安（はまん）出身の高麗人の官吏である趙彝（ちょうい）等が日本との通交を進言した。彼は、官僚であったために貢ぐものは何もなかった。また軍で活躍できるほどの体格も持っていなかった。そのために、「征服する新たな場所の情報」を出すことにしたのだ。趙は「日本は高麗の隣国であり、典章（制度や法律）・政治に賛美するに足るものがあります。また、漢・唐の時代以来、日本は使節を派遣して中国と通じてきました」と述べたという。

当時、この趙彝以外にも日本の素晴らしさを賛美する声は少なくなかった。有名なマルコポーロの『東方見聞録』では「島では金が見つかるので、彼らは限りなく金を所有している。しかし大陸からあまりに離れているので、この島に向かう商人はほとんどおらず、そのため法外の量の金で溢れている。この島の君主の宮殿について、私は1つ驚くべきことを語っておこう。その宮殿は、ちょうど私たちキリスト教国の教会が鉛で屋根を葺くように、屋根がすべて純金で覆われているので、その価値はほとんど計り知れないほどである」と書いており、「黄金の国ジパング」は瞬く間に有名になった。また、南宋の遺臣鄭思肖（ていしょう）も「元賊は、その豊かさを聞き、（使節を派遣したものの）倭主が来臣しないのを怒り、土（南宋）の民力をつくし、舟艦を用意して、これに往きて攻める」と言って日本の豊かさを報告しているのである。

元の皇帝フビライ・ハンは「朕、宋と日本とを討たんと欲するのみ」と明言し、高麗の造船により軍船が整えば「或いは南宋、或いは日本、命に逆らえば征討す」としていたのである。

時宗のところに元の使節団が来たのは文永5年（1268年）であった。この年の3月に執

権に就任したばかりの時宗は、いきなりの難題にさすがに驚いた。時宗はこのとき、外交は朝廷の管轄事項であるとして後嵯峨上皇に転送している。朝廷では連日評定が行われたが、結論が出ないままである。その間に元の使節は帰国してしまったのである。

フビライ・ハンが船を建造している間、そして軍が整うまでの期間、使節の往来は続いた。日本の使節も1度、元の都大都に行っている。しかし、軍と船の用意が整った文永11年（1274年）、元はいきなり対馬・そして壱岐に攻め入ってきたのである。その軍は当時、10万といわれていたが、実際は6万5000、船300程度であったという。

これに対して、時宗も手をこまねいていたわけではない。鎮西に所領を持つ東国御家人に領地に赴くように命じ、守護の指揮のもと蒙古襲来に備えさせ、さらに鎮西の悪党の鎮圧を命じた。また文永9年（1272年）には異国警固番を設置、鎮西奉行の少貳資能（しょうにすけよし）、大友頼泰（おおともよりやす）の2名を中心として、元軍の襲来が予想される筑前・肥前の要害の警護、および博多津の沿岸を警固する番役の総指揮に当たらせた。また、高麗に人を派遣し、諜報活動やかく乱作戦を行っているのである。

「まあ、使節団が来たときには、元はもう日本を攻める気でいたのだろう。私ならそうする。軍の準備が整うまで引き延ばして、相手が油断している間に攻め込む。それが軍の常道だからな。それに対して、こちらはしっかりと準備を整えた気がする」

鎌倉にある時宗は、そのように回想した。自分の行ったことに後悔はなかった。

元軍の猛攻はすさまじかった。日本はかなり善戦したが、そもそも名乗りを上げてから一騎打ちをする日本の戦の方法と、集団でかかり、鉄砲で威嚇をしながら戦うモンゴルの戦法とは全く異なった。初戦でその戦法の違いにより主力が敗走すると、後がなかなか続かなくなってしまう。

逆に元軍は奮戦した武士の遺体の腹を裂き、肝をとって食べ、また射殺した軍馬も食べたという。そのような状況であったために、日本軍が徐々に戦意を失って水城に逃げ、膠着状態が続いたのである。このとき、八幡神の化身と思われる白装束30人ほどが出火した宮崎宮（は

こぎきぐう)より飛び出して、矢先を揃えて元軍に矢を射掛けた。恐れ慄いた元軍は松原の陣を放棄し、海に逃げ出したところ、海から不可思議な火が燃え巡り、その中から八幡神を顕現したと思われる兵船2艘が突如現れて元軍に襲い掛かり、元軍をみな討ち取った。そのうえ生き残りがまだ多いときに、沖に逃れた元軍の船は大風に吹きつけられて敗走したのである。

「もし、このときに日本の軍兵が1騎なりとも控えていたならば、八幡大菩薩の御戦とは言われずに、武士達が我が高名にて追い返したと申したはずだろう」としながら、「元軍がひどく恐れ、あるいは潰れ、あるいは逃亡したのは、偏に神軍の威徳が嚴重であったからで、思いがけないことがいよいよ顕然と顕われ給ったものだと、伏し拝み貴はない人はなかった」(『八幡愚童訓』より、なお『一代要記』にも同様の記載あり)という報告がなされたのである。神の軍と神風、この2つで元軍は引き揚げ「文永の役」といわれる元寇が終わった。

この神風について公家の広橋兼仲(ひろはしかねなか)は、その日記『勘仲記』の中で「逆風の事は、神明のご加護」と書いているし、また、官宣旨(かんせんじ)の文言にも「就中蒙古凶賊等来着于鎮西、雖令致合戦、神風荒吹、異賊失命、乗船或沈海底、或寄江浦、是則非靈神之征伐、観音之加護哉」(蒙古の凶賊等が鎮西に来着し合戦をしたのだが、神風が荒れ吹き、異賊は命を失い、船を棄て或いは海底に沈み、或いは入江や浦に寄せられた。これは即ち靈神の征伐、観音の加護に違いない)(『薩藩旧記 前編卷五 国分寺文書』大宰府庁下文より)とあり、神風という感覚が時宗の時代にも存在したのである。

「実際にあれで終わると思っていたんだが、まさかまた来るとはなあ。何しろ神が風を吹かせて敵を追い払ったんだ。元も高麗も、まさか神に逆らってもう1度来るとはねえ」

元は文永の役の後に、使者を遣わした。

「敗走したのに、まだ降伏を勧めてくるとはいったい何事か」

そのとき、鎌倉に来ていた使者団の1人が、鎌倉の武器を絵に描いていた。

「なるほど、使節の衣を着た間諜であったか」

時宗は、躊躇することなく大宰府にいた副使などを含め、使節団をすべて処刑した。その後

もう1度使節団が来るが、これもすべて処刑してしまったのである。

弘安4年(1281年)、蒙古軍3万、高麗軍1万、南宋軍10万の合計14万、軍船4500艘が二手に分かれて襲ってきた。

しかし、今回は前回敗戦しているということから、元軍側に「日本攻略の自信」がなかったのか、または文永の役で、元軍との戦い方を熟知した御家人が多くなったのか、いずれにせよ、元軍は襲ってくるものの、それほど強さは感じなかった。

志賀島での戦いも、また壱岐での戦いも、いずれも鎌倉幕府軍はそれなりの損害を出しながら、それでも敵を退けたのである。しかし、南宋軍10万が合流したのちは、やはり「多勢に無勢」であり、不利な状況が続いた。

時宗は、引付衆の宇都宮貞綱(うつのみやさだつな)率いる6万余騎ともいわれる大軍を六波羅探題(ろくはらたんだい)から進撃させ、自らも出陣する準備を整えていたほどである。そのような中、平戸沖に停泊した元軍に対して、九州の軍が海戦を仕掛けたのである。いわゆる「鷹島沖海戦」である。この戦は、かなり大掛かりで朝から日暮れまで続いたといわれる。時宗のところに、その報告がなかったので、あまり詳細なことはわからないが、かなりの激戦で元軍側も、相当な被害が出たようであった。

そして、元軍は体勢を立て直すまでの期間、平戸沖の停泊を余儀なくされ、大宰府への全軍での侵攻を遅らせる結果になったのである。

「いや、2回目の元寇を退けたのは、実は鷹島沖海戦が最もよかったのかもしれない。いや、あれがあったから元軍は船の上において、再度神風が来たのだ」

弘安4年7月30日夜半、突如吹き始めた突風と大雨は、元軍を大いに悩ませた。『張氏墓誌銘』によれば、台風により荒れた波の様子は「山の如し」であったといい、軍船同士が激突して沈み、元兵は叫びながら溺死する者が無数であったという。台風により艦船同士が衝突し砕け、鎧兜を着た元軍の兵はすべて海中に没した。高麗国王高宗の子息、王●¹の子で東路軍の左

¹ ●……糸へんに亨

副都元帥アラテムル（阿剌帖木兒）は台風を受けて溺死している。

この「神風」によって、4500といわれた船団は、200にまで減少。戦争を継続する能力がなくなり、元軍は引き揚げるしかなかったのである。

「神は、元を退けることを私の運命としたのだろう。どうも、私もこれまでのようだ。元と戦った御家人の恩賞のこと、また、再度元が来襲した場合の備え。何よりも、元にばかり力を割いたので、鎌倉のことは何一つやっていない。それなのに、こんなところで病に臥せっているとは情けない。私にはやることはまだまだあるのだが……」

時宗は、翌日自分の身体が執権の激務に耐えられないとして出家した。弘安7年（1284年）4月4日のことである。すでに、自分の病が治らないと知っていた。

「いや、治らないのではない。神は、私の体を治すのではなく、日本を神風で救ったのだ。私の身体を治すはずの力を使い、いや、それ以上の力で神が日本を救った。それでいいのかもしれない」

そう言うと時宗は静かに目を閉じた。出家したその日に、33年（満32歳）の生涯を閉じたのである。

第11話 足利尊氏

「ずっと裏切り続けてきた私が裏切られるとはなあ」

場所は東海道の難所である駿河国さった峠、伊豆国国府がある三島と対峙していた。三島には、長年一緒に鎌倉幕府討伐、そして後醍醐天皇との闘いを戦い抜いてきた弟の足利直義が1万の軍を率いて陣を興していた。

「まさか、直義と戦うことになるとは思わなかった。」

足利尊氏は、たった3000の兵しかいなかったが、宇都宮氏綱などの関東諸氏と合流するつもりでいたので、それほど苦もなかった。山の麓を取り囲むように直義軍が布陣し、その向こうにはすでに宇都宮の軍のものと思われる騎馬の土煙が見えていた。

「直義の性格だ。山の上いきなり攻めかかってくることもあるまい。今のうちにゆっくり休んでおくかな」

尊氏は、床几（しょうぎ）²に腰を下ろすと竹筒に入った酒を一気に飲み干した。尊氏にしてみれば、酒を飲まなければやりきれない気分であったのだ。

「まあ、裏切り続けてきたバチでも当たったかな」

確かに思えば裏切りばかりであった。

源氏一門の武士の家である足利家に生まれた尊氏は、当初、執権北条高宗の1字をもらって「高氏」と名乗っていた。このときは、鎌倉幕府の一員である。兄が早くに亡くなったために、元弘元年（1331年）に家督を継いだ。その年に、後醍醐天皇が2度目の鎌倉幕府討幕の兵を挙げる。鎌倉幕府は高氏に派兵を命じる。高氏は当初、父貞氏の喪が明けるまで挙兵参軍はしたくないということを幕府に伝えるが、幕府は全くそれを聞き入れなかった。「人の情のない組織だ」、高氏は、幕府に対してこのときに漠然と思った。しかし、そのときは幕府に反抗することなど思いもつかず、しぶしぶ軍を動かすのである。高氏は天皇の拠る笠置と、楠木正成の拠る

² 床几……折りたたみの腰かけ。

下赤坂城の攻撃に参加し、功を立てる。しかし、しぶしぶの参軍であったために、他の大将を置いて朝廷に挨拶もせず、さっさと鎌倉へ戻ってしまうのである。

元弘3年（1333年）、隠岐の島に流されていた後醍醐天皇が脱出し、伯耆国船上山に籠城。再度討幕の兵を挙げる。これに対して幕府は、再度足利高氏に出兵するように促すのだ。足利高氏は、当時病気で伏せていたが、西国の討幕勢力を鎮圧するために名越高家（なごえたかいえ）とともに司令官として上洛した。しかし、後醍醐天皇からの誘いもあったこと、そして、父の喪中や自分の病気など、高氏の事情を考慮しない幕府の「非人情的な命令」に反発し、播磨国の赤松円心、近江国の佐々木道誉らの反幕府勢力を糾合し、丹波国篠村八幡宮で討幕軍として兵を挙げる。高氏にとって「1回目の裏切り」である。

「あのときは、裏切って当然と思ったね。そりゃそうだろう。だって武士も人間だからね。人としての感情がなかったり、あるいは家の事情を理解しないなんていうことをしては、当然に人が離れていくよ。人が離れば、その組織は滅びる。金や領地がいくらあっても駄目。それどころか、官職とかくれたって組織がなければ何の意味もない。幕府はそこがわかってなかったから裏切った。いや、幕府に裏切ってくださいと言われていたようなものだよ」

竹筒の酒を飲みながら、尊氏は眼下に広がる1万の直義の兵を見ていた。尊氏の思ったとおり、直義は全く動かない。

「あのとき後醍醐天皇は、自分の名前から尊という字をくれて尊氏に変更したんだよな。しかし、字をくれるくらいがそんなにいいものかね。なんだかわからんが、どうもそういうことで人は満足するらしい」

足利尊氏が後醍醐天皇の討幕側に寝返ったことで、多くの御家人が討幕側に移った。御家人は元寇以来、恩賞が滞っている状況であり、幕府に不満があった。そんな幕府に対して、さまざまな反乱が企てられ、結局不満を持ったまま軍を出さなければならない状態であったのだ。当時の尊氏と同じような境遇の武士が少なくなかったのだ。

そして、そのように討幕側で兵を起こした上州の新田義貞が、鎌倉に攻め入って鎌倉幕府は

崩壊する。このとき、尊氏が人質として出していた庶長子、竹若丸は伯父に連れ出され鎌倉を出たが、脱出に失敗し、途中で北条の手の者に捕まり殺害されている。

「次に裏切ったのが後醍醐天皇か」

後醍醐天皇は、鎌倉幕府を滅ぼすと自ら政務をとった。しかし、「鎌倉幕府討幕」という目標は同じでも、その理由は武士と貴族では全く異なる。「アンチ」は「アンチ」でしかなく、その後政権をとっても方向性が違うので、すぐにバラバラになってしまうのである。貴族中心の政治を行おうとした後醍醐天皇と、恩賞を得ることで一族郎党を養う武士とでは、生活様式も価値観も全く違う。そのことが非常に大きな差になったのである。

早くからそのことに気付いていた尊氏は、後醍醐天皇の建武の新政の中心メンバーにはならなかった。後醍醐天皇も尊氏を煙たく思っていたし、また尊氏の下にいる武将を直接指示できるほうが都合がよかった。市井では「尊氏なし」といわれていたのである。

そのような中、北条時行を擁立した北条氏残党の反乱である中先代の乱が起こり、後醍醐天皇から尊氏に対して討伐命令が出る。尊氏は後醍醐天皇に征夷大將軍に任命するように言ったが、それは許されず、征東將軍の位を与えられた。

「怒ったね、あのときは。あれだけやって、京都を幕府から取り返してあげて、にもかかわらず征夷大將軍にはしないと。武士の棟梁と私のことを認めないんだからね。そりゃ、貴族の中ではそうかもしれないが、それじゃこっちが困る」

尊氏は直義の軍勢と合流し相模川の戦いで時行を駆逐し、その後鎌倉を奪還するが、そこで尊氏はそのまま鎌倉に本拠を置き、独自に恩賞を与え始めた。京都からの上洛の命令も拒んで、武家政権創始の動きを見せるのである。これに対して天皇は義貞に尊良親王（たかよししんのう）をとまわせて尊氏討伐を命じた。実際に戦っていた足利直義や高師直（こうのもろなお）が劣勢になると、尊氏がその軍を率い、新田軍を箱根・竹ノ下の戦いで破り、京都へ進軍を始めた。まさに「尊氏2回目の裏切り」である。

しかし、東北の北畠顕家や楠木正成・新田義貞の連合軍に摂津豊島河原の戦いで敗れると、

九州に逃げた。

「あのときは直義とも仲良くやっていたのだが、まさか直義とこうやって山の上と下で対峙するとは思ってもみななかったなあ。やはり因果応報、裏切って来た人間は裏切られるのだ」

直義の軍は山に上がってくる気配はなかった。その代わり一部の軍隊が宇都宮軍と思われる土煙のほうに向かっている。

「ほうほう、直義は先に宇都宮軍をやるつもりだな。直義の負けだ。軍は正面で分けたほうが負ける。直義はそこがまだわかっていない」

尊氏はそう言うと、「弓を射かけましょうか」という問いに対して首を振った。

「何も戦争を急ぐことはない。後で必ず攻め上ってくる。そのときまで弓を大事にしておけ」

尊氏は、もう1度ぐっと竹筒の酒をあおった。今までは、直義が危機ならば自分が軍を率いて助けに行っていた。しかし、今回はその直義を危機に陥れているのが、ほかならぬ自分自身の軍なのである。

「まあ、もう少し休んでいていいだろう」

九州に逃げた足利尊氏は筑前国宗像大社（むなかたたいしゃ）の宗像氏範の支援を受ける。そして宗像大社に参拝後、尊氏は神がかり的な勝利を挙げる。筑前多々良浜の戦いにおいて、天皇方の菊池武敏らを破り、鞆の浦あたりまで来たときには、光厳上皇の後醍醐天皇討伐の院宣を獲得し、西国の武士を急速に傘下に集めて、再び東上するのである。

そして、兵庫湊川の戦いで新田義貞・楠木正成の連合軍を打ち破り、楠木正成の首を取ったのである。足利の勢力は、比叡山に逃れていた後醍醐天皇の顔を立てる形での和議を申し入れた。和議に応じた天皇は三種の神器を光厳上皇の弟、光明天皇に譲る。しかし、後醍醐天皇は京都を抜け出し、吉野へ逃れ、光明天皇に譲った三種の神器は偽物であり、自らがたずさえたものが本物であると称して独自の南朝を樹立した。尊氏は実質的に室町幕府をたてるのである。

「幕府ができてから、そこからが問題であったのかなあ」

幕府ができたのち、軍事指揮権と恩賞権は尊氏が、政務は弟の直義が行った。しかし、その

うち軍事指揮権の尊氏、そして尊氏の代理である高師直と、弟の直義が対立し始めたのである。政務に重責を負った武士の恩賞をめぐることがその始まりというが、実質のところはわからない。そもそも後醍醐天皇と同じで、直義と高師直の間には「同床異夢」があったのかもしれない。政権が手に入ると、どうしても「同じ方向の理想」を持っている人間でなければ内部で対立が始まる。尊氏は、横で後醍醐天皇の建武の新政の失敗を見ていながら、同じ失敗を自分のひざ元で起こしてしまったのである。

「自分の代理と弟の戦いなど、どちらにも味方できないよなあ。そのうえ、俺の子供を直義が養子で引き取ってくれているのだ。直義を責められなかったんだ」

当初は直義を引退させるのであるが、高師直は、もともとそれだけのことができる人間ではなかった。尊氏自身も政務をしっかりと行えるものではなく、武士の棟梁として恩賞と軍事の権限だけにとどめなければ自分にぼろが出ることもわかっていた。そこで高師直にすべてを任せましたが、当然、武士の間に不満が続出する。そのような中、自分の息子で直義の養子に入った足利直冬が反乱を起こす。その討伐軍を組織するが、内部で直義派が裏切り敗北が続いた尊氏は、高師直などの殺害許可を条件に和議を進めることになる。まさに、自分の代理人として活躍した高師直、師泰（もろやす）兄弟の殺害を許可してしまうのである。これが「第三の裏切り」である。

果たして、京都に戻る籠の中で、尊氏は師直が殺されることを肌で感じていた。そのためにわざと遠く後ろに自分の行列を作ったのだ。そのような状態で京都に護送される高師直、師泰兄弟を父の敵として恨んでいた上杉能憲（うえすぎよしのり）が襲撃し、あっさりと2人とも殺されてしまうのである。直義は、殺されることを当然わかかっていて警備を手薄にしたのであった。

「あれで落ち着くと思ったのだからなあ」

直義派は徐々に人が少なくなった。まっすぐで政務に詳しい直義は、軍の駆け引きに上手で人の心を巧みに操り、そして裏工作が得意な尊氏の敵ではなかった。徐々に直義派といわれる

武士が襲撃されたり尊氏派に寝返ったり、直義は結局京都を追われることになる。まさに今度は弟の直義を裏切って、京都から追い出してしまったのである。尊氏「第四の裏切り」であった。

そしてこの「第四の裏切り」の結果、鎌倉で挙兵した直義と対峙したのが、今ここにいる駿河国さった峠であった。

「宇都宮軍は、兵の扱いがうまい。そのうえ、直義はこちらにも気を使わなければならないから、兵の動かし方が単調になる。もうじき直義の軍はこちらに引き上げてくるであろう」

宇都宮氏綱は自分の意のままに操れる一族郎党の軍3000の兵で巧みに戦い、直義側の桃井直常（もものいなおつね）率いる軍を破ると、その後、軍勢を数万に増やして箱根竹ノ下に到着した。そのとき尊氏が一気に攻め降りたために、直義の軍は算を乱して敗走する。直義は結局敗れ、鎌倉に幽閉されてしまうのである。

「直義、許せ。お前が活着していると、また兵が2つに割れてしまうのだよ」

尊氏は、涙を呑んで直義を毒殺して、「観応の擾乱」といわれる足利幕府内部の争いはなくなったのである。

しかし、まさに尊氏の思っていた因果応報とはこのこと。京都に攻め寄せてきた足利直義の養子で、尊氏の御落胤（ごらくいん）である直冬の軍に対し、尊氏は自ら先頭になって突撃する。軍は追い返すものの、尊氏自身は手傷を負い、そしてその傷が腫れて、それがもとで足利尊氏は亡くなってしまうのである。足利尊氏が亡くなったちょうど100日後に生まれるのが足利義満であった。

裏切りの人生、裏切ることは良いことではない。しかし、尊氏のように結果的に裏切った形になってしまう人は少なくない。乱世には裏切る不名誉よりも大事にしなければならないことがある。そういったものなのかもしれない。